

第16代学長

石橋 湛山 と 立正 大学



1. 立正大学第16代学長石橋湛山

雑誌『東洋経済』で小日本主義の論陣を張ったりベラルなジャーナリスト、戦後日本の復興期に首相に選出されながら病により退陣を余儀なくされた悲劇の政治家、病から再起を果たし日中米ソ平和同盟の提唱によって冷戦構造を打破しようとした不屈の平和主義者等々。石橋湛山は、20世紀日本の歴史のさまざまな局面における独特の活躍で、後世にまで鮮烈な印象を残している。だが、その石橋が少年期から教育者への志向を有し、実際に大学の教壇に立ったばかりでなく、学長として一大学の経営にまで携わった事実については、世に広く知られているとは言い難い。

石橋の父は、身延山法主まで務めた日蓮宗の重鎮、杉田堪誓（のちに日布）である。明治17年の石橋生誕当時、父堪誓は立正大学の前身である大教院の助教補であった。現在も続く高輪二本榎の承教寺に置かれていた大教院は、のちの明治37年に大崎谷山ヶ丘へとその機能を移し、日蓮宗大学林となる。大学林はさらに明治40年に日蓮宗大学と名を改め、その後の大学令発布によって大正13年に立正大学が誕生する。この間、日蓮宗大学時代の大正3年から5年にかけて、杉田日布は学長の要職も担っている。

戦後石橋が立正大学長となるについては、こうした日蓮宗との関係に加えて、大学の財政危機が直接的な要因となった。昭和20年5月の空襲で校舎の多くを失った大学は、学内人材での再建に苦慮する時期が続く。その中で、終戦後第一次吉田内閣での大蔵大臣経験者であり、昭和26年によく公職追放も解けた、政界実力者の石橋に白羽の矢が立ったのである。大学から公式に就任が打診されたのは、『石橋湛山日記』によれば昭和27年6月。実際に理事会で学長就任が決定したのは、同年12月1日のことであつた。

もっとも、教育の理念よりも当面の経営にしか目が向いていないかのような大学の姿勢には石橋も苦言を呈しており、喜んで学長就任を引き受けるという状況ではなかったようだ（「宗祖に帰れ」『大崎学報』掲載）。しかしだからこそ、大学を本来あるべき正しい姿へ導こうと、経営再建だけでなく教育や研究まで含めて、学長として強力なリーダーシップを発揮していくことになるのである。

2. 政治家と学長と

石橋が学長として在任した昭和27年12月から昭和43年3月までの期間は、政治家としての石橋にとっても激動の時期であつた。鳩山グループの主要メンバーであつた石橋は、昭和29年の鳩山内閣成立時に通商産業大臣に就任、昭和31年にはみずからが内閣総理大臣となる。不幸にも病によって総理の地位を辞したが、その後も昭和34年と38年の訪中や39年の訪ソなど、冷戦構造を打破しようと積極的な外交を展開した。立正大学でも通産大臣や総理大臣就任の折々に学内で祝典を催しており、記録写真も残されている。

その多忙の中、各種会議を取り仕切るのみならず、学生募集のため各地での「立正大学講演会」に出席し、就任当初の昭和28年度には経済学部で「経済特殊講義」を担当するなど、石橋は積極的に大学

運営に参画した。各学部教員とも機会を見つけては懇談し、研究の方向性を示唆したり勉強会を開いたりもした。日蓮宗出自の大学である点を踏まえ仏教を基軸とする教育研究を展開することは当然であったが、当時開設されたばかりの経済学部の充実も石橋にとって大きな課題であり、大学を多角的に発展させていくことが長期的な目標となっていた。

もちろん、石橋個人であらゆる課題に対処できたわけではない。日蓮宗関係では、山梨時代の恩師望月日謙の子である望月日雄や、柴又帝釈天の住職であった望月日慈が支えとなった。実業界からは石橋自身の依頼により森コンツェルン2代目の森暁が理事長の要職に就き、ジャーナリズムからはNHK解説委員を務めていた斎藤栄三郎も理事会に加わった。自由党メンバーであり後には衆議院議長も務めた山口喜久一郎は、もともと日蓮宗信者の家筋であり、石橋の学長就任の橋渡し役を務めるとともに、みずからも理事会メンバーに名を連ねた。政・財・宗教界のあらゆる人材が石橋の指揮下に一つのチームを形成して、当時の立正大学を支えたのである。

3. 学長期石橋の思想① ～日本経済の復興を目指して～

石橋の学長期は、ちょうど日本の戦後復興期とも重なる。すでに吉田内閣での大蔵大臣時代にも、一定程度のインフレ覚悟で石炭増産を起点に生産力の回復を図るなど、石橋は復興という課題に対して積極的な財政政策を取る姿勢を明確にしている。こうした積極財政志向は、学長在任中に総理大臣に就任した際も変わることはなかった。昭和31年12月14日の自民党総裁就任記者会見では、「私は経済政策の目標を完全雇用の実現に置く考えである。そのためにはまず仕事をふやし、経済の規模を拡大させることである」と述べるとともに、インフレの不安については「私の顔にはインフレと書いてあるという人があるが、その心配はない。一体学者の間でも、経済の拡大と安定をどうして調整するかハッキリした考えを持っている人はいないようだ。やはり物価とか国際収支の動きをみながらその時の状態に応じた手を打っていくより仕方がない。私は私なりに経済を拡大させながらインフレを起さずにすませる自信がある」と一蹴している。首相としての総合的な政策見取り図を示した「五つの誓い」でも、第三の課題として「雇用の増大、ひいては生産の増加」を掲げ、その果実をもって第四の課題である「福祉国家の建設」を実現すると宣言している。これらの政策には、経済の拡大によって豊かな国民生活を築いていこうとする石橋の強い意志が表現されている。

ただし、石橋の積極財政は、人気取りのためのバラマキ政治とは異なる。大衆迎合が民主主義の最大の弱点であることを鋭く指摘していたのも、また石橋であった。昭和32年1月17日に立正大学校庭で催された首相就任祝賀会での挨拶で、石橋は以下のように述べている。「此の間から私は全国を歩いて申しているのですが、私は皆さんのお気に入りの事をやりに出ているのではない。皆さんのお気に入りの事をやる事もある。それは今日の民主主義の最も危険とする所は、あまり人人の気に入る事ばかりやりすぎる。即ちオベッカ政治になる所が民主主義の一番危険な所である。でありますから、もし間違った事をやったら御注意を願いたい、お気に入りの事から間違いであるということはないのであります。」

いわゆる55年体制下でバラマキ政治を経験してきた現在の私たちにとって、石橋の積極財政とオベッカ政治の区別をすることは簡単ではない。公債発行も視野に入れながら道路整備や住宅建設をおこなうという石橋の経済政策は、私たちの目にはむしろ国民に対するあからさまな御機嫌取りにも見える。だが、終戦直後においては物資不足からくる物価騰貴は深刻な問題であり、その後もインフレ防止は経済政策上最優先の課題であり続けた。そのような歴史的文脈の中では、石橋の積極経済政策は招かれざるバラマキ政治として、強い批判を受ける可能性も高かった。その逆風の中で、独学で学んだケインズ理論を武器にみずからの信ずる正論を主張し続けたことこそ石橋の真骨頂であり、石橋積極財政の真の価値もまさにその点にあったのである。

4. 学長期石橋の思想②～仏教思想を育み、伝える～

先に引いた首相就任祝賀会での挨拶は以下のように続いており、石橋に対する日蓮宗の影響をうかがわせるに十分である。「わが日蓮聖人も当時においては随分人々の気に入らん事をいったりやったりして迫害を受けられたようであります。私も日蓮門下の末輩の一人とし、聖人の御精神をついでそれ丈の覚悟を以ってやりたいと考えます。」

とはいえ、石橋の思想を過度に仏教や日蓮宗に引きつけて理解することには、いくばくかの危険がある。確かに少年期には日蓮宗長遠寺に預けられ、明治28年には得度もしている。しかしよく知られるように、中学校時代の校長の大島正建や、大島の師である札幌農学校のウィリアム・クラークからの思想的影響も無視できない。また、早稲田大学在学中に田中王堂から教えを受けたプラグマティズムも、石橋の思想の強固な基盤を形成している。おそらく日蓮宗については、学問的な哲学思想としてではなく、先の引用文に見られるように、行動や生活を枠づける基礎的な価値観や道徳観として受容されていたと考えた方がいいだろう。思想体系そのものというより、迫害を受けながらも真実の言論を貫き通した日蓮の生涯こそが、石橋にとって人生の導きの糸だったと思われる。

ただ、仏教を世界にも通じる日本思想の重要な貢献と見る姿勢は、学長期の石橋に一貫している。当時の立正大学は仏教学部・文学部・経済学部の三学部からなっていたが、なかでも仏教学部の振興を論ずるに際して、石橋は昭和29年3月の『別冊東洋経済』で次のように論じている。「仏教は、もちろん印度に起り、支那を経て、日本に伝来したものだが、しかし今日においては、もはや教学としての仏教は、日本以外には見るべきものを止めず、同時にまた日本が世界に向って誇りうる思想史上の産物は、おそらく仏教を除いて他にあるまいと信ずるからである。日本の大学としては、すべからくここにその特色を求むべきだと思う。」こうした日本仏教への讃歌の背景に、「実に日蓮が、その創造性と独立心とによって、仏教を日本の宗教にしたのであります。他の宗派が、いずれも起源をインド、中国、朝鮮の人にもつのに対して、日蓮宗のみ、純粋に日本人に有するのであります」（『代表的日本人』）と述べた内村鑑三の思想などを辿ることもできるかもしれない。また石橋は、立正大学における仏教研究の充実にも注力しており、釈迦の故郷と目されるネパールのティラウラコット遺跡の発掘調査も石橋学長時代に開始

されたものである。

ただし、石橋は仏教思想を学生に強要することはなかった。日蓮の生き方を模範として示したのは、自主独立の精神を堅持し自分自身で考えることの重要性を強調するために他ならない。たとえば、昭和33年に立正大学新聞紙上に掲載した「新入学生に告ぐ」で、石橋は日蓮の『開目抄』を念頭に置きながら、「日蓮聖人も智者にわが義破られるときは、これに従うといわれておる。吾々は人のいうことを無批判にうけとらないと同時に、謙虚な気持ちを持って人のいうことを十分に聞く雅量を持たねばなりません。それがすなわち学問の精神であり自主独立の精神であり立正精神であります」と語りかけている。言論人石橋は、特定の思想のために言論の自由を犠牲にするという誤りを犯すことはなかったのである。

5. 石橋から学ぶべきこと

現代日本にとっての石橋湛山とは、実現されなかった可能性の束である。もし石橋の小日本主義が論壇の主流となっていたならば、日本があれほど急激に戦争への道を進んでいくことはなかったかもしれない。もし石橋が公職を追放されていなかったならば、アメリカと対等な関係を保ちながらの戦後復興が可能となっていたかもしれない。もし石橋が総理就任直後に病に倒れなかったならば、派閥抗争が日本の政治を蝕むこともなく、国会は言論の府としての威厳を保っていたかもしれない。もし石橋に日中米ソ平和同盟を粘り強く論じていく時間が残されていたならば、日本は冷戦の終焉に大きな役割をはたしていたかもしれない。もちろん、これら全てが確実に実現していたと論じるならば、夢想家の虚言といわれても仕方あるまい。それでも、日本には別の日本になりうる道があった。石橋の存在は、私たちにそのことを思い出させてくれる。

立正大学長としての石橋は、みずからの個々の政策や信念を教職員や学生に強要することはなかった。強調されているのは、むしろその政策や信念に行きつくまでのプロセスである。石橋自身が独学で地道に経済学を学んだように、学生たちも毎日少しずつの努力を続けるべきこと。特定の思想信条に縛られることなく、やわらかに物事を見る目を養うこと。アジアや世界を見据えるフレッシュで広大なヴィジョンを持つこと。こうしたアドバイスを通じて、学生たちは眼前の現実を鵜呑みにせず新しい可能性へと視野を広げるように促された。そして、石橋が学長の椅子を降りた後も、学園を巣立っていった人材により、新たな可能性の束が育み続けられている。

私たちが石橋から学ぶべきは、何よりもこの「可能性」である。私たちは、今の私たちとは異なる私たちがありうる。そして、そのために必要な想像力と、未来に対する良い意味での楽観主義を、受け継いでいかなければならない。記録の中に見える石橋には、明るさが満ち溢れている。その明るさは、没後半世紀を経た今でも、私たちを希望ある未来へと導く確固とした灯火なのである。

(立正大学法学部教授 早川誠)

1. Tanzan Ishibashi, 16th President of Rissho University

Over the course of his multifaceted life, Tanzan Ishibashi was known as a liberal journalist, a powerful political figure who became Japan's prime minister in 1956, and a pacifist who worked to end the Cold War. However, many people are unaware that Ishibashi also served as the president of a university.

Ishibashi's father, Nippu Sugita, was a prominent figure in the world of Nichiren Buddhism. During the Taisho period he served as the president of Rissho University, which was known at the time as Nichiren-shu (Nichiren Buddhism) University.

Ishibashi's own appointment as Rissho University president was a result of both the ties he had to Nichiren Buddhism and a financial crisis the university was facing. Rissho had lost most of its school buildings during US military air raids in May 1945. The task of rebuilding them was immensely challenging, so the university could not avoid appointing an influential person from outside the school. That is why the university asked Ishibashi, a powerful politician who had already served as finance minister from 1946 to 1947, to serve as president. Ishibashi was officially appointed to the position on December 1, 1952, and immediately began working to rebuild the university's finances. He also showed strong leadership in the fields of research and education.

2. Statesman and University President

Ishibashi served as Rissho University's president from 1952 to 1968. During that time, he also served as Japan's minister of international trade and industry and then as its prime minister. Even after he retired from his post as prime minister because of illness, Ishibashi visited China and the Soviet Union and worked to bring the Cold War to an end.

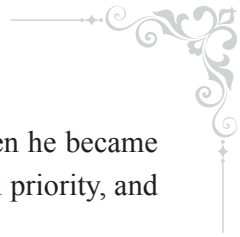
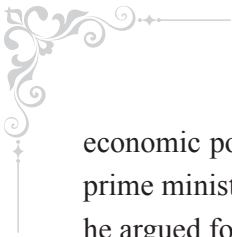
Despite being busy with all of the above activities, Ishibashi still participated in lectures around the country designed to recruit students, taught courses in the faculty of economics, and participated in the management of the university. He also had significant and rewarding interactions with professors in the faculties of Buddhist studies, letters, and economics, and worked to help the university grow in every way possible.

The university's board of directors—which included prominent figures from a variety of areas, including Nichiren Buddhism, economics, and government—provided Ishibashi with invaluable support. Satoru Mori, managing director of the university, was also the head of a large conglomerate called Mori Konzern. Nichio Mochizuki was the executive director and was in charge of finances. Eizaburo Saito was a commentator for NHK, and Kikuichiro Yamaguchi was a prominent politician in Japan's Liberal Party. These members and others worked tirelessly to realize Ishibashi's goals.

3. The Ideals of President Ishibashi

—Striving for the Economic Recovery of Japan—

Ishibashi's term as university president overlapped with Japan's postwar recovery. During this period, Ishibashi constantly asserted that it was necessary to pursue aggressive governmental and



economic policies to achieve full employment. The Five Promises Ishibashi made when he became prime minister pegged increased employment and manufacturing as a top governmental priority, and he argued for the creation of a welfare state based on this priority.

However, Ishibashi's aggressive governmental policies differed from the profit sharing, handout style of government that eventually became the status quo under the Liberal Democratic Party. That's because postwar fears of inflation were still strong, and there was a distinct possibility that the Japanese people would criticize Ishibashi's policies for encouraging inflation. His policies were unique in that as he faced potential criticism for his actions, he used the Keynesian principles that he had learned to pursue his own reasoning and convictions.

4. The Ideals of President Ishibashi

—Nurturing and Spreading Buddhist Thought—

Although Ishibashi identified himself as a follower of Nichiren Buddhism, we shouldn't labor too hard to link his ideas with Buddhist thought. This is because Christianity, pragmatism, and other important schools of thought also inspired his ideas. Ishibashi probably didn't approach Nichiren Buddhism as a scholarly system of thought, but rather used its fundamental values and morals to provide a framework for his actions and life.


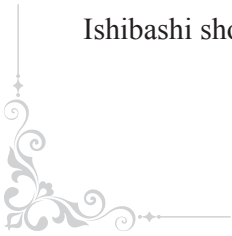
During the period he served as president, however, Ishibashi always thought of Buddhism as a Japanese school of thought that was relevant for the entire world. The reason he emphasized the promotion of Rissho University's Faculty of Buddhist Studies was because he believed that Japanese universities should make education and research based on Buddhism one of their distinctive features. However, Ishibashi never imposed Buddhist thought on those around him. One reason he modeled his life after Nichiren was to attain the strength of will necessary to stand up to the powerful men of his time. Ishibashi started out as a journalist, and he never sacrificed freedom of expression for specific ideas.

5. What We Should Learn from Ishibashi

Today in Japan, Tanzan Ishibashi symbolizes a number of possibilities that were never realized. If his "small Japan policy" had gained greater support—and if he had not been purged from office and had not become ill after becoming prime minister—the history of Japan might have been quite different.

As university president, Ishibashi never imposed specific government policies or ideas on faculty or students. Instead, he made it a priority to encourage each individual to imagine new possibilities on his or her own. The tradition that he established in research and education remains strong.

What we should learn from Ishibashi is to pursue new possibilities, and that even in difficult times we can radically transform ourselves. To do that, however, we need imagination and optimism. Ishibashi showed us the possibility of a bright future.





発行日：2025年3月31日

編集発行：立正大学文書館

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL. 03-3492-2690

